【文献・資料】

【小沢による著作・論考】（本書に関するもののみ）

単著（単行本）

一九六九、『私は河原乞食・考』、三一書房。
一九七二、『小沢昭一雑談大会』、芸術生活社。
一九七三、『私のための芸能野史』、芸術生活社。
一九七四 a、『珍奇絶倫 小沢大写真館』、話の特集。
一九七四 b、『清談・性談・聖談そして雑談』、白川書院。
一九七四 c、『日本の放浪芸』、番町書房。
一九七五、『猥学探検』、創樹社。
一九七六 a、『言わぬが花　小沢昭一的世界』、文藝春秋。
一九七六 b、『私は河原乞食・考』、文春文庫。
一九七八 a、『わた史発掘　戦争を知っている子供たち』、文藝春秋。
一九七八 b、『雑談にっぽん色里誌』、講談社。
一九八二、『日本の放浪芸』、角川文庫。
一九八三、『私のための芸能野史』、新潮文庫。
一九八五、『雑談にっぽん色里誌』、徳間文庫。
一九八六、『言わぬが花　小沢昭一的世界』、文春文庫。
一九八七、『わた史発掘　戦争を知っている子供たち』、文春文庫。
一九九二、『背中まるめて　「小沢昭一的こころ」のこころ』、新潮文庫。
一九九六、『放浪芸雑録』、白水社。
一九九八 a、『もうひと花』、文春文庫。（単行本、一九九一、文藝春秋）
一九九八 b、『ものがたり 芸能と社会』、白水社。
二〇〇〇、『話にさく花』、文春文庫。（単行本、一九九五、文藝春秋）
二〇〇一、『ぼくの浅草案内』、ちくま文庫。（単行本、一九七八、講談社）
二〇〇三・二〇〇四、『小沢昭一百景・随筆随談選集』、全六巻、晶文社。
二〇〇四、『日本の放浪芸』、白水社。
二〇〇五 a、『散りぎわの花』、文春文庫。（単行本、二〇〇二、文藝春秋）
二〇〇五 b、『私は河原乞食・考』、岩波現代文庫。
二〇〇六 a、『小沢昭一的新宿末廣亭十夜』、講談社。
二〇〇六 b、『日本の放浪芸 オリジナル版』、岩波現代文庫。
二〇〇六 c、『珍奇絶倫 小沢大写真館』、ちくま文庫。
二〇〇七、『昭和～平成　小沢昭一座談』、全五巻、晶文社。
二〇〇八、『小沢昭一がめぐる寄席の世界』、ちくま文庫。（単行本、二〇〇四、朝日新聞社）
二〇〇九 a、『老いらくの花』、文春文庫。（単行本　二〇〇六、文藝春秋）
二〇〇九 b、『わた史発掘　戦争を知っている子供たち』、岩波現代文庫。

二〇一〇、『日々談笑　小沢昭一対談集』、ちくま文庫。（単行本、二〇〇〇、晶文社）

論考・エッセイ

一九七〇・九・二四、「小沢昭一対談　名神好色道路　七色にキラリと光るＶサインの奥　人気ナンバーワン関西に隠れもなきヌードの華」、『週刊アサヒ芸能』、一〇六～一一〇頁。

一九七一・六、「放浪芸をひとまず訪ね終えて」、『日本の放浪芸』、解説書、日本ビクター、一頁。

一九七一・八、「お茶の間放談　テレビばかりが芸じゃない」、『文藝春秋』、三〇二～三一〇頁。

一九七二・一、「足芸師（げそし）」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート①」、『芸術生活』、七四～七九頁。

一九七二・二、「女相撲（上）」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート②」、『芸術生活』、八〇～八五頁。

一九七二・三、「女相撲（下）」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート③」、『芸術生活』、九〇～九五頁。

一九七二・四、「浪花節――そのケレン読み」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート④」、『芸術生活』、八六～九二頁。

一九七二・五、「万歳」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート⑤」、『芸術生活』、八四～九〇頁。

一九七二・六、「説教・絵解」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート⑥」、『芸術生活』、九六～一〇二頁。

一九七二・七、「トクダシ（上）」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート⑦」、『芸術生活』、九七～一〇三頁。

一九七二・八、「トクダシ（下）」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート⑧」、『芸術生活』、八七～九三頁。

一九七二・九、「東京の大道芸人窟（上）」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート⑨」、『芸術生活』、六九～七五頁。

一九七二・一〇、「東京の大道芸人窟（下）」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート⑩」、『芸術生活』、九九～一〇五頁。

一九七二・一一、「漫才」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート⑪」、『芸術生活』、九九～一〇五頁。

一九七二・一二a、「再び万歳」、「私のための芸能野史《雑芸者》歴訪ノート最終回」、『芸術生活』、九三～九九頁。

一九七三・一二b、「お金と換える芸能」、『又日本の放浪芸』、解説書、日本ビクター、二～三頁。

一九七四・四、「舌耕芸　香具師の場合」、『新劇』、二一巻四号、七〇～八四頁。
一九七四・七、「『日本の放浪芸』始末書」、『また又日本の放浪芸』、解説書、日本ビクター、三～四頁。
一九七五・一、「祝福芸の神々」、『國文學』、二〇巻一号、一一八～一二一頁
一九七五・三、「一条さゆり以後の一条さゆり」、『季刊藝能東西』、一、櫻春号（創刊号）、五五～六二頁。
一九七五・七、「一条さゆり以後の一条さゆり　和歌山刑務所面会記」、『季刊藝能東西』、二、螢夏号、五三～五七頁。
一九七五・一〇、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える１」、『季刊藝能東西』、三、雁秋号、五四～六八頁。
一九七六・一、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える２」、『季刊藝能東西』、四、炭冬号、五六～七〇頁。
一九七六・四、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える３」、『季刊藝能東西』、五、花吹雪号、七二～八五頁。
一九七六・七、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える４」、『季刊藝能東西』、六、蝉時雨号、二〇六～二二〇頁。
一九七六・一〇、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える５」、『季刊藝能東西』、七、野分雲号、五四～六八頁。
一九七七・一、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える６」、『季刊藝能東西』、八、寒牡丹号、二二二～二四五頁。
一九七七・四、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える７」、『季刊藝能東西』、九、揚雲雀号、五四～七二頁。
一九七七・七、「一条さゆり以後の一条さゆり　裁判記録をもとに考える８」、『季刊藝能東西』、十、遠花火号、二〇八～二三三頁。
一九七九・一一、「浪花節と私」、『新劇』、六一～八五頁。
一九九〇、ＣＤ『小沢昭一が訪ねた能登の節談説教』、解説書、ビクター。

共著（著作・論考・座談会）〔刊行年月昇順〕
小沢昭一・野村喬・早野寿郎・宮尾しげを・山口龍之介　一九七一・五、「ドキュメンタリー・レコード『日本の放浪芸』をめぐって」、『テアトロ』、三三七、七〇～八五頁。
一九七二・五、『現代』
小沢昭一・永六輔　一九七二、『陰学探検』、創樹社。
秋元松代・小沢昭一　一九七三・一、「対談　日本の放浪芸」、『新日本文学』、二八巻一号、七〇～七七頁。
小沢昭一・村岡良一　一九七三・一一、「放浪芸と音」、『録音のすべて 1974』（『ステレオ』『週刊 FM』別冊）、音楽之友社、二一四～二二一頁。

小沢昭一・関山和夫・永六輔・祖父江省念　一九七四 1、『説教－埋もれた芸能史からの招待』、風媒社。
五来重・本田安次・小沢昭一　一九七四・一、「祝う・祈る・呪う、そして騙る――芸能の源流をさぐる――」、『言語生活』、二六八、三～一四頁。
正木ひろし・小沢昭一・小中陽太郎　一九七四・六、『潮』、一八〇、「猥褻・ワイセツ・わせつ――てい談」、一九六～二〇六頁。
小沢昭一・長部日出雄・斎藤真一　一九七四・九、「放浪芸人の足の裏」、『中央公論』、九八巻九号、二九二～三〇三頁。
多田道太郎・小沢昭一　一九七七・五、「ストリップとラブ・ホテルの大衆文化論」、『潮』、二一六、一七〇～一八〇頁。
桐かおる・小沢昭一　一九七七・七、「桐かおるのアートとハート」、『季刊藝能東西』、遠花火号、二～七頁。
小沢昭一　VS 鈴木清　一九七七・一一、「露店の手品師」、『新劇』、二四巻一一号、六〇～六七頁。
小沢昭一・佐藤綾　一九七八、『ドキュメント　綾さん　小沢昭一が敬愛する接客のプロフェッショナル』、新しい芸能研究室。
南博・永井啓夫・小沢昭一編　一九八一～一九八二、『芸双書』、全十巻、白水社。
小沢昭一・佐藤綾　一九八三、『ドキュメント　綾さん　小沢昭一が敬愛する接客のプロフェッショナル』、新潮文庫。
小沢昭一・網野善彦　一九九一、「大道からの視点」、（網野善彦ほか編）『大道と見世物』（大系日本歴史と芸能一三）、平凡社。
小沢昭一・林雅彦　一九九三、「放浪芸と私－絵解きにもふれて」、（林雅彦編著）『絵解き万華鏡　聖と俗のイマジネーション』、三一書房、一二九～一四四頁。
小沢昭一・照屋林助・竹中労　二〇〇三、「変幻自在なるもの　琉球諸芸」、ＣＤ復刻版『沖縄／祭り・うた・放浪芸』の解説書、ＣＢＳソニー、一～一四頁（初版は一九七六年）。
小沢昭一・永六輔　二〇〇七 a、『平身傾聴裏街道戦後史　色の道商売往来』、ちくま文庫。
――　二〇〇七 b、『平身傾聴裏街道戦後史　遊びの道商売往来』、ちくま文庫。
小沢昭一・土方鉄　二〇一三、『芸能入門・考――芸に生きる』、明石書店。

MOOK

一九八三、『小沢昭一の世界』、白水社。
二〇一〇、『KAWADE 夢ムック　文藝別冊　［総特集］小沢昭一』、河出書房新書。

はじめに【文献・資料】

飯田卓編著　二〇一七、『文化遺産と生きる』、臨川書店。
――　二〇一七、『文明史のなかの文化遺産』、臨川書店。

荻野昌弘編著 二〇〇二、『文化遺産の社会学―ルーヴル美術館から原爆ドームまで』、新曜社。
片桐新自編著 二〇〇〇、『歴史的環境の社会学』、新曜社。
鈴木聖子 二〇一九、『〈雅楽〉の誕生―田辺尚雄が見た大東亜の響き』、春秋社。
鈴木良・高木博志編著 二〇〇二、『文化財と近代日本』、山川出版社。
東京大学文化資源学研究室 二〇二一、『文化資源学ー文化の見つけかたと育てかた』、新曜社。
アンリ・ベルクソン 二〇一五、(熊野純彦訳)『物質と記憶』、岩波文庫。(原著／Henri Bergson, *Matière et Mémoire : Essai sur la relation du corps à l'esprit*, Paris: Félix Alcan, 1896)(邦訳の原著は第七版)
早稲田大学演劇博物館 二〇一六・三、『演劇博物館報 enpaku book』、 一一二号、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館。
渡辺裕 二〇一三、『サウンドとメディアの文化資源学』、春秋社。
Pierre Nora (eds.) 1984-1992, *Les Lieux de mémoire*, Gallimard, Paris, 3 tomes : t. 1 La République (1 vol., 1984), t. 2 La Nation (3 vol., 1986), t. 3 Les France (3 vol., 1992) ; Gallimard Quarto, 3 tomes, 1997. (邦訳(選集)／谷川稔監訳『記憶の場―フランス国民意識の文化=社会史』、全三巻、岩波書店、二〇〇二〜二〇〇三年)

記事

『毎日新聞』 二〇二〇・一〇・二三、地方版／広島、二二頁、「三原市文化財：三原市文化財に2件指定 「のぞきからくり」と手形巨石 ／広島」。

序章【文献・資料】

網野善彦 二〇〇八、『網野善彦対談集 「日本」をめぐって』、洋泉社。(単行本は二〇〇二年)
荒俣宏 二〇〇〇、『万博とストリップ―知られざる二十世紀文化史』、集英社新書。
井家上隆幸 一九八五、 「解説」、(小沢昭一)『雑談にっぽん色里誌』、徳間文庫、四七三〜四七七頁。
泉沙織 二〇二二・一、「戦後日本における「ストリップショー黄金時代」のバーレスク志向」、『コモンズ』、一号、一一五〜一二六頁、DOI https://doi.org/10.57298/commons.2022.1_115。(最終閲覧日、二〇二二年九月二二日)
市川捷護 一九七一・六、「あとがき」、『日本の放浪芸』、解説書、ビクター、五四頁。
今谷明 二〇一二、『天皇と戦争と歴史家』、洋泉社。
岩佐壮四郎 二〇一五・七、「岡鬼太郎の喜劇」、『関東学院大学人文学会紀要』、第一三二号。
梅山いつき 二〇一二、『アングラ演劇論 叛乱する言葉、偽りの肉体、運動する躰』、作品社。
永六輔 一九六五、『わらいえて 芸能一〇〇年史』、朝日新聞社。(連載初出は『大阪朝日新

聞』、一九六四年）
―― 一九六九、『芸人 その世界』、文藝春秋。（連載初出は『話の特集』、一九六六年）
―― 一九六九、『芸人たちの芸能史 河原乞食から人間国宝まで』、（大宅壮一監修「ドキュメント=近代の顔」②）、番町書房。
―― 一九七一、『われらテレビ乞食』、白馬出版。（連載初出は『話の特集』、一九六六年）
永六輔・矢崎泰久・坂梨由美子 一九九六、『話の特集ライブラリー 永六輔の特集』、自由国民社。
扇田昭彦 一九七三・一、「小沢昭一は河原乞食・考」、『美術手帖』、二五号、二〇～二三頁。
大笹吉雄 一九八六、『日本現代演劇史　大正・昭和初期篇』、白水社。
―― 一九九八、『日本現代演劇史　昭和戦後編 I』、白水社。
―― 二〇〇一、『日本現代演劇史　昭和戦後編 II』、白水社。
大西信之 一九六九・一一、「（書評）小沢昭一著『私は河原乞食・考』」、『芸能』、一一、六五頁。
―― 一九七七、『正岡容』、文藝春秋。
小熊英二 二〇〇二、『〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナショナリズムと公共性』、新曜社。
唐十郎 一九七六、『唐十郎と紅テント その一党――劇団状況劇場 一九六四―一九七五』、白川書院。
河竹繁俊 一九五九『日本演劇全史』、岩民書店。
―― 一九六六、『概説日本演劇史』、岩波書店。
菅孝行 二〇〇七『戦う演劇人 戦後演劇の思想 千田是也 浅利慶太 鈴木忠志』、而立書房。
京谷啓徳 二〇一五、「秦豊吉と額縁ショウ」、（中野正昭編）『ステージ・ショウの時代』（森話社、二一五～二四〇頁。
工藤保則 二〇二〇、「新天地からふるさとへ 小沢昭一の「語り芸」に関する一考」、『龍谷大学社会学部紀要』、五六、七～一六頁。
郡司正勝 一九五二・二、「河原者と芸能」、（早稲田大学文学部綜合世界文芸研究会編）『綜合世界文芸』、四、一〇四～一二一頁。
―― 一九五四、『歌舞伎入門』、社会思想研究会出版部。
―― 一九六二、『新訂 かぶき入門』、社会思想社。（岩波現代文庫、二〇〇六年）
―― 一九六二・一〇、「芸人の血統」、『国文学 解釈と鑑賞』（昭和三十七年十月特集増大号「芸能・芸人の系譜」）、一一五～一一七頁。
劇団俳優座編 一九六五、『俳優座史 一九四四～一九六四』、劇団俳優座。
―― 一九七四、『俳優座史 一九六五～一九七三』、劇団俳優座。
小島美子 一九八二、「解説」、『日本の放浪芸』、角川文庫、三〇七～三一五頁。
後藤淑 一九六四、『日本芸能史入門』、社会思想社。
小谷野敦 一九九九、『江戸幻想批判 「江戸の性愛」礼讃論を撃つ』、新曜社。（『改訂新版　江戸幻想批判 「江戸の性愛」礼讃論を撃つ』、新曜社、二〇〇八年）

佐々木崇夫 二〇〇六、『三流週刊誌編集部 アサヒ芸能と徳間康快の思い出』、バジリコ。
千田是也 一九六四、『近代俳優術』上・下、早川書房。
―― 一九七五、『もうひとつの新劇史 千田是也自伝』、筑摩書房。
田中小実昌 一九七〇、『あぁ人生ストリップ』、サンケイ新聞。
田中千禾夫 一九五五、『とら』、『海の星＝ひとで』（ラジオ・ドラマ新書）、宝文館、一七〜二四頁。
―― 一九六七、『とら』、（『田中千禾夫戯曲全集』、第７巻）、白水社、七〜一四頁。
津金沢聡広、一九六四・一一、「戦後日本の「大衆芸術・娯楽」研究の動向　附・関係主要文献目録（一九四五年〜一九六四年七月）」、『関西学院大学社会学部紀要』、二八一〜二九八頁。
堂本正樹 一九七一、『伝統演劇と現代』、三一書房。
永井荷風 一九九〇、『榎物語』、（『雨蕭蕭・雪解け　他七篇』）、岩波文庫。（初出は『中央公論』、一九三一年五月。文庫初版は一九八七年）
中原弓彦（小林信彦） 一九七二・二、「上昇志向と下降志向 渥美清、小沢昭一、ジェリー藤尾」（連載「日本の喜劇人９」）、『新劇』、一九巻二号、八二〜九一頁。
―― 一九七二、『日本の喜劇人』、晶文社。
中谷陽 一九七五、『おお特出し　秘話・関西ストリップ』、立風書房。
橋本与志夫 一九九五、『ヌードさん ストリップ黄金時代』、筑摩書房。
秦豊吉 一九五五、『劇場二十年』、朝日新聞社。
林屋辰三郎 一九五四、『歌舞伎以前』、岩波新書。（復刻版二〇一六年）
―― 一九六〇、『中世芸能史の研究―古代からの継承と創造』、岩波書店。
―― 一九七三、『古代中世芸術論』、（『日本思想大系』、二三）、岩波書店。
林屋辰三郎・植木行宣 一九六二・一〇、「河原者の流れ」、『国文学 解釈と鑑賞』（昭和三十七年十月特集増大号「芸能・芸人の系譜」）、二六〜三二頁。
早野寿郎 一九七二、「『榎物語』『説教板敷山』を演出して」、LP『唸る、語る、小沢昭一 榎物語・説教板敷山』、解説書、ビクター。
広末保 一九七〇、『悪場所の発想 伝承の創造的回復』、三省堂。
松崎仁 一九九七、「初期歌舞伎研究のあゆみ」、『近世演劇を学ぶ人のために』、世界思想社、一二九〜一四五頁。
三木幹夫 一九八一、『ブルーフィルム物語 秘められた映画七五年史』、世文社。
三田完 二〇一五、『あしたのこころだ　小沢昭一的風景を巡る』、文藝春秋。
村松友視 二〇〇三、『今平犯科帳 今村昌平とは何者』、NHK 出版。
本山譲二 二〇一六・一〇、「芸能の始源を探した“ふたり”　永六輔と小沢昭一　それぞれの芸能論」、『ユリイカ』、四八（一四）、二〇二〜二〇七頁。
森彰英 一九九八、『行動する異端 秦豊吉と丸木砂土』、TBS ブリタニカ。
森福二郎 一九五三、『臍の見える劇場』、文藝出版。

矢崎泰久 二〇〇五、『「話の特集」と仲間たち』、新潮社。
矢野誠一 一九八五・八、「「新劇寄席」――「演技」と「芸」を結んだ早野寿郎の演出――」、『悲劇喜劇』、三八巻八号、八八～九一頁。
山路興造 二〇一三・五、「小沢昭一的芸能史」、『図書』、二〇～二三頁。
脇田晴子 二〇一三、『日本中世被差別民の研究』、岩波書店。
Dumont, Éric & Manigot, Vincent 2014, « Une histoire du striptease japonais », *Cipango*, 21, 133-185.
Suzuki, Seiko 2018, « Le striptease et les intellectuels des années 1960 – 1970 : Ozawa Shôichi et Document / Arts itinérants du Japon », *Japon Pluriel*, vol.12, SFEJ, 139-146.

記事

『朝日ジャーナル』 一九六七・八・二七、八三～八九頁、「現代“河原者”」（開かれた世代・三五）。
『週刊アサヒ芸能』 一九六七・二・一二、八八～九一頁、「軽薄派・小沢昭一のヨイショリズム サルトルとトルコを同居させる秘密」。
『週刊現代』 一九七八・三・九、六～一二頁、「小沢昭一の“男の郷愁”を行く あれから 20 年、旧赤線・遊郭再訪」。
『週刊サンケイ』 一九七〇・二・一六、三二～三三頁、「東京で『マン博』を演出する小沢昭一」。
『週刊大衆』 一九六五・一二・一六、六七～六九頁、「ズバリこの人 突如参上 ああキビシきは“トルコ”の道――八方破れの中に芸道を極める小沢昭一――」。
『週刊文春』 一九六七・一〇・九、九〇～九四頁、「“エロ事師”が惚れた大阪の夜 「ネオン太平記」に主演する小沢昭一の風流行状記」。
『週刊読売』 一九七六・一一・二七、一六～一七頁、「トルコ文化はきびしい取り締まりによって発展する」。
『現代』 一九七四・一一、「佐藤愛子・川上宗薫 爆笑トピック漫才 われと来て歌えやトルコ『行進曲』」、二〇八～二一六頁。
『毎日グラフ』一九六八・九・一五、一一～一七頁、「まじめなエロ事師 小沢昭一さん」（連載「行動する人間」二九）、（本誌　秋岡義之、撮影　東康生）。

第一章【文献・資料】

相田洋 二〇〇三、『ドキュメンタリー 私の現場 記録と伝達の 40 年』、NHK 出版。
阿部美春 二〇一二・五、「テープ録音機物語 その六三 カセット（１）」、*JAS Journal*、五二巻三号、一七～二八頁。
池上良正 二〇一九、『増補　死者の救済史　供養と憑依の宗教学』、ちくま学芸文庫。
石井美保他編著 二〇二一、『環世界の人文学 ＜生と創造の探究＞』、人文書院。

石崎勝久 一九七一・八、「●日本の放浪芸●滅びかけている芸能に対する愛情」、『キネマ旬報』、一一四〜一一五頁。
市川捷護 一九七一・六、「あとがき」、『日本の放浪芸』、解説書、ビクター、五四頁。
—— 一九七二・一一、「『日本の放浪芸』で得たもの」、『テアトロ』、三五六、二四〜二五頁。
—— 二〇〇〇、『回想 日本の放浪芸 小沢昭一さんと探索した日々』、平凡社。
—— 二〇〇三、『ジプシーの来た道 原郷のインド・アルメニア』、白水社。
市川捷護・市橋雄二、二〇一〇、『中国５５の少数民族を訪ねて』、白水社（新装版）。（旧版は一九九八）
伊藤亜紗 二〇一五、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』、光文社新書。
今林直樹 二〇二二・三、「ノスタルジーの国際関係論」、『人文社会科学論叢』、三一、五一〜六六頁。
永六輔 一九七一・八、「遊芸に生きる小沢昭一の放浪人生」、『週刊朝日』、七六巻三八号、一四二〜一四五頁。
大道晴香 二〇一七、『「イタコ」の誕生 マスメディアと宗教文化』。
小川洋三 一九七一・六、「隠された道 小沢昭一と共に」、『日本の放浪芸』、解説書、ビクター、五二頁。
金子智太郎 二〇一七、「一九七〇年代の日本における生録文化 録音の技法と楽しみ」、『カリスタ』、二三、八四〜一一二頁。
上島敏昭 一九九九、「見世物研究資料」、（鵜飼正樹・北村皆雄・上島敏昭編著）『見世物小屋の文化誌』、新宿書房、三二四〜三三三頁。
川村邦光 二〇〇六、『巫女の民俗学 〈女の力〉の近代』、青弓社。
君塚雅憲 二〇一二、「テープレコーダーの技術系統化調査」、（国立科学博物館産業技術史資料情報センター編）『国立科学博物館技術の系統化調査報告』、第一七集、一八五〜二七三頁。
郡司正勝 一九七一・六、「放浪の芸能」、『日本の放浪芸』、解説書、ビクター、四〜七頁。
薦田治子 二〇〇六・一二、「薩摩盲僧琵琶の誕生と展開 平家琵琶から薩摩盲僧琵琶へ、そして薩摩琵琶へ」、（お茶の水音楽研究会編）『お茶の水音楽論集』、二七七〜二八八頁。
桜井徳太郎 一九七四、『日本のシャマニズム』、上巻、吉川弘文館。
—— 一九七七、『日本のシャマニズム』、下巻、吉川弘文館。
マリー・シェーファー 一九九八、（鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳）『サウンド・エデュケーション』、春秋社。（新版・二〇〇九年）
—— 二〇〇六、『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』、平凡社ライブラリー。（新装版・二〇二二年）
庄野進 一九九七、「サウンドスケープ論の立脚点 出発点と現在」、（谷村晃・鳥越けい子編）『現代のエスプリ サウンドスケープ』、三五四、五〇〜五八頁。
ジョナサン・スターン 二〇一五、（中川克志・金子智太郎・谷口文和訳）『聞こえくる過去』、

インスクリプト。（原著：Jonathan Sterne, *The Audible Past : Cultural Origins of Sound Reproduction* , Duke University Press, 2003.）
瀬尾文彰 一九八六、「環境的な〈もの〉」、（小川博司、庄野泰子、田中直子、鳥越けい子編著）『波の記譜法　環境音楽とはなにか』、時事通信社、一七五〜一九四頁。
武田徹 二〇一七、『日本ノンフィクション史 ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』、中公新書。
田中直子 一九八六、「環境音楽のコト的・道具的存在性 日本の音文化から」、（小川博司、庄野泰子、田中直子、鳥越けい子編著）『波の記譜法　環境音楽とはなにか』、時事通信社、一一七〜一四七頁。
谷口文和・中川克志・福田裕大 二〇一五、『音響メディア史』、ナカニシヤ出版。
鳥羽耕史 二〇一〇、『１９５０年代 「記録」の時代』、河出書房。
鳥越けい子 一九九七、『サウンドスケープ：その思想と実践』、鹿島出版社。
日本ビクター株式会社 50 年史編集委員会編　一九七七、『日本ビクター50 年史』、日本ビクター株式会社。
橋本裕之 二〇一四、『舞台の上の文化 まつり・民俗芸能・博物館』、追手門学院大学出版会。
原英子 二〇一三・三、「人々はイタコに何を求めるのか(3)：創造されるイタコイメージとイタコの実態」、『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』、第一五号、 五一〜五六頁。
兵頭晶子 二〇〇七、「憑依が精神病にされるとき 人格変換・宗教弾圧・精神鑑定」（第四章）、（河村邦光編著）『憑依の近代とポリティクス』、青弓社、一四七〜一七七頁。
細川周平 一九八一、『ウォークマンの修辞学』、朝日出版社、エピステーメー叢書。
—— 一九九〇、『レコードの美学』、勁草書房。
真島一郎 一九九七、「憑依と楽屋 情報論による演劇モデル批判」、『儀礼とパフォーマンス』（『岩波講座　文化人類学』、第九巻）、岩波書店、一〇七〜一四七頁。
三橋一夫 一九七一・九、「断末魔の叫び 日本の放浪芸」、『レコード芸術』、二〇巻九号、二二四〜二二九頁。
宮田章 二〇一六、「『録音構成』の発生—NHK ドキュメンタリーの源流として—」『NHK 放送文化研究所年報』、六〇、一〇一〜一七一頁。
三隅治雄 一九七一・一〇、（レコード評）「小沢昭一取材・構成　ドキュメント日本の放浪芸（レコード）」、五八頁。
吉見俊哉 一九九五、『「声」の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史』、講談社（河出書房新社、二〇一二年）。
脇田晴子 二〇〇一、『女性芸能の源流 傀儡子・曲舞・白拍子』、角川書店。
渡辺裕 一九八九、『聴衆と音楽 ポスト・モダン時代の音楽文化』、春秋社（新装版、二〇〇四年／中公文庫、二〇一二年）。
—— 一九九七、『音楽機械劇場』、新書館。
—— 二〇一三、『サウンドとメディアの文化資源学 境界線上の音楽』、春秋社。

―― 二〇一七、『感性文化論 〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』、春秋社。
ヤーコプ・フォン・ユクスキュル／ゲオルク・クリサート 二〇〇五、（日高敏隆・羽田節子訳）『生物から見た世界』、岩波文庫。
Riffaud, Madeleine, *Dans les marquis "Vietcong"*, Paris, R. Julliard, 1965.

記事

『読売新聞』 一九七〇・九・一九、夕刊、九面、「話芸の源「説教」をとりあげる異色の会 小沢昭一ら俳小で開く」。
『読売新聞』 一九七一・五・三一、夕刊、七面、「劇団俳小 変わった試み三つ」。
『朝日新聞』 一九七三・一一・六、夕刊、九面、「こんどは"てきや芸術"」。

第二章【文献・資料】

永六輔 一九六五、『わらいえて 芸能 100 年史』、朝日新聞社。
―― 一九七一、『われらテレビ乞食』、白馬出版。
―― 二〇〇四、『昭和 僕の芸能私史』、知恵の森文庫。（単行本は朝日新聞社、一九九九年）
大須賀順意著／府越義博（編訳） 二〇一一、『現代文 説教の秘訣』、国書刊行会。
桂米朝 一九七二、「『榎物語』について」、ＬＰ『唸る、語る、小沢昭一 榎物語・説教板敷山』、解説書、ビクター。
金森千栄子 一九七三・一一、「一期一会の"音" 「石崎の女"片倉千代"」を作って」、『月刊民放』、三〇～三二頁。
澤田篤子 二〇〇二・一〇、「仏教儀礼における「語り物」の音楽構造―表白・講式を例として―」、『日本の語り物 口頭性・構造・意義 国際日本文化研究センター共同研究報告』、一八一～一九三頁。
関山和夫 一九六四、『説教と話芸』、青蛙房。
―― 一九七八、『説教の歴史』、岩波新書。
―― 一九七四・七、「節談説教」、『また又日本の放浪芸』解説書、日本ビクター、七～一一頁。
―― 一九八二、『仏教と民間芸能』、白水社。
―― 一九八七・三、「節談説教」、『国文学 解釈と鑑賞』、五二巻三号（特集 日本人の心のふる里への回帰（レトロ）さすらう芸と寄席の芸）、六七～七二頁。
関山和夫・浅井成意味・釈徹宗・杉本光昭・直林不退・府越義博 二〇〇九・一〇、「座談会 今後の節談の方向性 芸能と布教の境界」、『節談説教』、六～一〇頁。
祖父江省念『節談説教七十年』平成復刻版
鶴森緑 二〇一一・一二、「北陸放送 MRO ラジオ・ストーリー『日本列島ここが真ん中』 日常に息づく人間ドラマを生放送」、『月刊民放』、二五～二七頁。
直林不退 二〇〇七、『節談椿原流の説教者』、永田文昌堂。

―― 二〇一六・三、「小沢昭一の遺産と課題―『日本の放浪芸』再復刻によせて―」、『大法輪』、一八〇～一八三頁。
―― 二〇一八、「「節談説教」像の再検討」、『人文学研究』、第三号、三五～五四頁。
―― 二〇二〇、『布教技法としての節談』、永田文昌堂。
西山郷史 一九九一、「節談説教の風土」、『音と映像と文字による大系日本歴史と芸能』、第五巻、『踊る人々　民衆宗教の展開』、解説書、二八～六一頁。
北陸放送編 一九七七、『地域とともに四半世紀―北陸放送二十五年史』、北国出版社。
輪島裕介 二〇一〇、『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』、光文社新書。

記事

『週刊アサヒ芸能』 一九七六・一二・二、八七～一〇二頁、「本誌連載対談　歴代ホスト総登場 PART-I　アノときのおんな　アノときのおとこ　裏話」。
『季刊ステレオサウンド Stereo Sound』 一九七七・一、四一、三一一～三三一頁、「テープデッキ　世界の一流品」。
『季刊ステレオサウンド Stereo Sound』 一九七七・七、四三、二四九～二八三頁、「評論家の選ぶ '77 ベストバイ・コンポーネント３」。

第三章【文献・資料】

井家上隆幸 二〇〇九、「竹中労 七〇年代の行動」、（記忘記同人編）『日本禁歌集の宇宙』、邑楽舎／メディアルネッサンス、七六～八七頁。
市川捷護 二〇〇〇、『回想 日本の放浪芸 小沢昭一さんと探索した日々』、平凡社。
永六輔 一九七一・八、「遊芸に生きる小沢昭一の放浪人生」、『週刊朝日』、七六巻三八号、一四二～一四五頁。
大島渚 二〇〇九、「『日本春歌考』へ」「『日本春歌考』に参加する諸君へ」、（四方田犬彦編）『大島渚著作集』、第三巻、現代思潮新社、五八～七〇頁。
大野光明 二〇一四、『闘争の時代 1960／70 分断を乗り越える思想と実践』、人文書院。
岡田真紀 一九九五、『世界を聴いた男――小泉文夫と民族音楽』、平凡社。
葛西周 二〇〇八、「博覧会の舞踊にみる近代日本の植民地主義―琉球・台湾に焦点をあてて」『東洋音楽研究』、七三、二一～四一頁。
笠原政治 一九九〇、「鳥居龍蔵の沖縄調査」、『東京大学総合研究資料館標本資料報告』、第一八号、鳥居龍蔵資料アーカイブ推進協議会『鳥居龍蔵とその世界』（http://torii.akazawa-project.jp/cms/photo_archive/kasahara/、二〇二二年一〇月一〇日最終閲覧）
金井喜久子 二〇〇六、『ニライの歌』、琉球新報社。
金城厚 二〇一一、『沖縄音楽入門』、音楽之友社。
喜納昌吉 二〇一〇、『沖縄の自己決定権』、未来社。

記忘記同人 二〇〇九、「はじめに なぜいま、『日本禁歌集』なのか」、（記忘記同人編）『日本禁歌集の宇宙』、邑楽舎／メディアルネッサンス、四〜七頁。
木村聖哉 一九九九、『竹中労・無頼の哀しみ』、現代書館。
久万田晋 一九九六、「民族音楽における沖縄の発見」、（琉球大学編）『平成八年度沖縄地区大学放送公開講座 琉球に魅せられた人々—外からの琉球研究とその背景—』（琉球大学公開講座委員会）、八一〜八九頁。
—— 二〇一一、『沖縄の民俗芸能論 神祭り、臼太鼓からエイサーまで』、ボーダーインク。
小泉文夫 一九五八、『日本伝統音楽の研究』、音楽之友社。
—— 一九七一、「沖縄音楽の音階」、『人類科学』、第二三集、一六七〜一八四頁。
小島美子 一九九〇、「九学会連合と音楽学」、『人類科学』、四二、二〇三〜二二三頁。
坂野徹 二〇一二、『フィールドワークの戦後史 宮本常一と九学会連合』、吉川弘文館。
坂本正勝 二〇一五、「『小沢昭一の小沢昭一的こころ』番組 40 年の魅力」、CD『大沢悠里プロデュース 小沢昭一の小沢昭一的こころ 昭和の傑作選 CD ボックス』、解説書、日本コロムビア、COCJ-39330-9、年、六〜一二頁。
鈴木聖子 二〇一四、『「科学」としての日本音楽研究：田辺尚雄の雅楽研究と日本音楽史の構築』、東京大学大学院人文社会系研究科博士論文（文学）。
—— 二〇一九、『〈雅楽〉の誕生——田辺尚雄が見た大東亜の響き』、春秋社。
—— 二〇二二・一、「声と音の芸能史『小沢昭一的小三治』」、『ユリイカ』、二一一〜二一八頁。
鈴木義昭 一九九四、『風のアナキスト 竹中労』、現代書館。
添田知道 一九六六、『日本春歌考』、弘文堂カッパブックス。
高橋美樹 二〇一一、「レコードに初めて録音された沖縄音楽—一九一五年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して」、『高知大学教育学部研究報告』、七一、二二九〜二四二頁。
—— 二〇一二、「沖縄音楽レコードにみる〈媒介者〉の機能—一九三〇年代・日本コロムビア制作の SP 盤を対象として」、（細川周平編著）『民謡からみた世界音楽 うたの地脈を探る』、ミネルヴァ書房。
竹中労 一九六五、『美空ひばり 民衆の心をうたって二十年』、弘文堂。
—— 一九六六、『ビートルズレポート　話の特集臨時増刊号』、日本社。（「完全復刻版」、WAVE 出版、一九九五年）
—— 一九七〇・五・二九、「“ド助平人間”はまじめでござる　小沢昭一」（第一五回「連載スターを斬る！　竹中労の芸能社会評論」）、『週刊読売』、一二四〜一二七頁。
—— 一九七〇、『芸能界をあばく』、日新報道。
—— 一九七三、『ニッポン春歌行 もしくは「春歌と革命」』、伝統と現代社。
—— 一九七五 8、『琉歌幻視行 島うたの世界』、田畑書店。
—— 一九七五・八、「続メモ・沖縄　変幻自在なるもの　琉球諸芸①」、『話の特集』、一五〇〜一五八頁。

—— 一九七五・九、「続メモ・沖縄　変幻自在なるもの　琉球諸芸②」、『話の特集』、一四八〜一五八頁。
—— 一九七五・一一、「続メモ・沖縄　最終回・総括篇・上」、『話の特集』、一五二〜一六〇頁。
—— 一九七五・一二、「続メモ・沖縄　最終回・総括篇・了」、『話の特集』、一五〇〜一五九頁。
—— 一九九九、『決定版ルポライター事始』、ちくま文庫。
—— 二〇〇二、『琉球共和国—汝、花を武器とせよ！』、ちくま文庫（単行本は一九七二年）。
—— 二〇〇三、「解説Ｉ」、ＣＤ復刻版『沖縄／祭り・うた・放浪芸』、解説書、ＣＢＳソニー、一五〜二一頁。
たけなか・ろう 一九八六、『にっぽん情哥行』、ミュージック・マガジン。
田辺尚雄 一九六八、『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』、音楽之友社。
—— 一九八二、『続田辺尚雄自叙伝』、邦楽社。
鳥居龍蔵 一九七六 a、『ある老学徒の手記』、（斎藤忠編）『鳥居龍蔵全集』、第十二巻、朝日新聞社（単行本は朝日新聞社、一九五三年）。
—— 一九七六 b、『有史以前の日本』、（斎藤忠編）『鳥居龍蔵全集』、第一巻、朝日新聞社（単行本は『有史以前乃日本』、磯部甲陽堂、一九一八年）。
野坂昭如 一九七六、『四畳半襖の下張・裁判』、面白半分。
福岡正太 二〇〇三、「小泉文夫の日本伝統音楽研究 民族音楽学研究の出発点として」、『国立民族学博物館研究報告』、二八・二、二五七〜二九五頁。
普久原恒勇編 一九八六、『沖縄の民謡』、池見屋書店。
普久原恒勇・ビセカツ 二〇〇九、「『海のチンボーラー』の季節」、（記忘記同人編）『日本禁歌集の宇宙』、邑楽舎／メディアルネッサンス、六四〜七三頁。
町田佳聲・浅野健二編 一九六〇、『日本民謡集』、岩波文庫。
三島わかな 二〇一四、『近代沖縄の洋楽受容—伝統・創作・アイデンティティ』、森話社。
矢崎泰久 一九七〇・五、「話の特集レポート 話の特集博覧会五〇号記念ステージ」、『話の特集』、三二〜五八頁。
—— 二〇〇五、『「話の特集」と仲間たち』、新潮社。
柳家小三治 二〇〇六、「この温かさが寄席なんだ」、（小沢昭一著）『小沢昭一的新宿末廣亭十夜』、講談社、一六八〜一八二頁。
湯浅学 二〇〇九、「公序良俗の「恥部」をしたたかに撃つ庶民の知恵」、（記忘記同人編）『日本禁歌集の宇宙』、邑楽舎／メディアルネッサンス、四四〜五一頁。
若林美冴 一九七五、『花の中年御三家　冗談半分』、KK・ロングセラーズ。
輪島裕介 二〇一〇、『創られた「日本の心」神話　「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』、光文社新書。
Seiko Suzuki 2015.1, "“Les recherches scientifiques sur la théorie de la musique orientale” de Tanabe

Hisao : étude sur la musicologie japonaise des années 1920", 法政大学国際日本学研究所編『国際日本学研究叢書 日本アイデンティティとアジア』、二一、法政大学出版局、二三九〜二五二頁。

記事

『朝日新聞』 一九七二・八・一一、二二面、「ひとけたの歌」。
『サンデー毎日』 一九七九・九・三〇、五八巻四二号、九五頁、「銀座ホステスよりトルコ嬢がいい 「小沢昭一の小沢昭一的こころ」でお父さんを激励する小沢昭一さん」(「テレビラジオ最前線」)。
『週刊明星』 一九七四・六・三〇、一七巻二四号、一五八頁、「型破り劇団を結成した小沢昭一 中華丼みたいな芝居が目標」。
『東洋學藝雑誌』 一九〇四・八、二一巻二七五号、三八一頁、「雑報」。

第四章【文献・資料】

浅野潜 一九七二・一二、「堂々と“肉の歓喜”を表出」、「今週の問題作批評 神代辰巳監督の『一条さゆり 濡れた欲情』 日活ロマン・ポルノの自信と居なおりの精神の萌芽」(田山力哉と連名)、『キネマ旬報』、五九三号、一〇九頁。
市川捷護 二〇〇〇、『回想 日本の放浪芸 小沢昭一さんと探索した日々』、平凡社。
京谷啓徳 二〇一五、「秦豊吉と額縁ショウ」、『ステージ・ショウの時代』(近代日本演劇の記憶と文化３)、二一五〜二四〇頁。
小倉孝保 一九九九、『初代一条さゆり伝説 釜ヶ崎に散ったバラ』、葉文館出版。
—— 二〇二二、『踊る菩薩 ストリッパー 一条さゆりとその時代』、講談社。
笠原和夫・荒井晴彦・絓秀美 二〇〇二、『昭和の劇 映画脚本家 笠原和夫』太田出版。
加藤詩子 二〇〇一、『一条さゆりの真実 虚実のはざまを生きた女』、新潮社。
加藤秀俊 一九五六・一二、「現代生活とムード・ミュージック」、『中央公論』、第七一巻第一三号、一二八〜一三三頁。
北崎契縁 一九九五・三、「『チャタレイ夫人の恋人』起訴前後の状況について」、『相愛大学研究論集』、第一一巻、一五〜三一頁。
神代辰巳 一九七五、「神代辰巳 自作を語る」、(斎藤耕一・神代辰巳編)『世界の映画作家』、二七、キネマ旬報社、一七一〜二〇六頁。
—— 二〇一九、『映画監督 神代辰巳』、国書刊行会。
孝学靖士 一九七三、『一条さゆり・裸の人生』、六月社書房。
駒田信二 一九八三、『一さゆりの性』、講談社文庫(単行本初版一九七一年)。
斎藤正治 一九七四・一〇、「実録桐かおる にっぽん一のレスビアン」、『キネマ旬報』、六四一号、一五〇〜一五一頁。
重松清 二〇〇九、(解説)「「小沢昭一的ことば」について」、(小沢昭一著)『老いらくの花』、

文春文庫、二三四〜二四二頁。
菅野聡美 二〇〇七、「琉球レビューと額縁ショー」、『現場としての政治学』、四一〜六四頁。
田中小実昌 一九七三・四・六、「異色対談／田中小実昌のエロスへ突撃　ストリッパーNo.1 桐かおる“ワイセツ受難”を語る　“レスの女王”が初めて明かす「特出し人生二〇年」」、『週刊サンケイ』、一六二〜一六六頁。
鶴見俊輔 一九九七、『アメノウズメ伝』、平凡社ライブラリー（初版は平凡社、一九九一年）。
—— 二〇一〇、「江戸文化を書き残す素描の集大成」、『KAWADE 夢ムック小沢昭一』（初出は『論座』、二〇〇四年三月）。
徳川夢声 二〇一八、『話術』新潮文庫（一九四七年、秀水社／一九五一年、白揚社）。
伝統芸能の会編 一九七七、『話藝——その系譜と展開』、三一書房。
中谷陽 一九七四・一一、「特出しレスビアン 桐かおる」、『映画評論』、三一巻一一号、七五〜七八頁。
野崎詩織 二〇〇八、『音楽聴取空間としての家庭における複製音楽の消費 1950 年代から 1960 年代の日本の「ムード音楽」言説』、修士論文、国立音楽大学。
濱田研吾 二〇〇三、『徳川夢声と出会った』、晶文社。
藤本義一 一九七二・三・一八、「義一ちゃんのケッタイな対談（一二）名ストリッパー 一条さゆり」、『週刊読売』、七四〜七八頁。
キャサリン・ブラックリッジ 二〇〇五、（藤田真利子訳）『ヴァギナ 女性器の文化史』、河出書房新社。
八木澤高明 二〇一七、『ストリップの帝王』、角川書店。
吉本力・橋本裕之・上島敏昭・宇野幸 一九九九、「小屋掛けストリップの日々」、（鵜飼正樹・北村皆雄・上島敏昭編著）『見世物小屋の文化誌』、新宿書房。
Suzuki, Seiko, « Le striptease et les intellectuels des années 1960 – 1970 : Ozawa Shôichi et Document / Arts itinérants du Japon », *Japon Pluriel*, vol.12, SFEJ, décembre 2018, 139-146.

記事

『朝日新聞』 一九六〇・五・一九、東京、夕刊、四面、「僕は“ドガジャカ派” 役柄はなんでもいい」。
『朝日新聞』、一九七二・五・八、夕刊、三面、「ピンク TV に制裁 出演ストリッパー逮捕 大阪府警」。
『朝日新聞』 一九七四・一二・二六、東京、夕刊、三面、「裸の元女王服役へ 一条さゆり 最高裁でも実刑」。
『朝日新聞』 一九七七・二・八、東京、夕刊、七面、「「日本の放浪芸」…今度はストリップの世界」。
『週刊文春』一九七五・一一・二七、「出所した一条さゆりの第一声（は労組幹部への講演）」、

二四〜二五頁。
『週刊明星』 一九七二・一二・二四、二〇五〜二〇六頁、「“ストリッパーの女王”一児の母一条さゆりにキビシイ実刑判決！」。
『サンデー毎日』 一九七二・一〇・二九、一四〇〜一四二頁、「火花散る一条さゆりポルノ裁判 『芸です』『いやワイセツだ』」。